

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝楽府訳注（二十六）：「洛陽道」八首
Author(s)	小川, 恒男
Citation	中國中世文學研究, 74 : 84 - 111
Issue Date	2021-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051125">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051125</a>
Right	
Relation	



## 六朝樂府詠注（二十六）——「洛陽道」八首——

小川恒男

はしがき

本稿には前稿に引き続き「洛陽道」の残り八首の詠注を掲載した。徐陵二首、岑之敬一首、張正見一首、陳暄一首、王瑳一首、江綏二首である。今回も橋英範氏「六朝詩に詠じられた洛陽—樂府『洛陽道』を題材として—」（岡山大学文学部プロジェクト研究報告書10『洛陽の歴史と文学』二〇〇八）を参考にさせて頂いた。紙面を借りてお礼を申し上げたい。いつもながらのことではあるけれども、詠注を作成する過程で幾つかの小さな気付きがあったが、小さくともそのすべてを【語釈】に書き込むことはできなかった。しかし、それなりに面白い記述もできたのではないかと思う箇所もある。

梁代では「洛陽」は「佳麗の所」、美しい女性が行き交う華の都として描かれ、詩人たちはしばしば「ボーイ・ミーツ・ガール」を主題として華麗な表現を競い合っていたのだが、陳代になると、物語の舞台を洛陽の朝に限定したり、全篇に典故を散りばめてみたり、后妃の徳を詠じたり、梁代とはやや趣を異にする主題が扱われるよ

うになる。陳の「洛陽道」のほとんどが陳後主叔宝の周辺で作成されたと推測できることと関連するだろう。また、さすがにネタ切れ状態になったのか、僻典といつていいのではないかと思われるような表現が増えるようにも思われる。詩人のそのあたりの悪戦苦闘ぶりも読む側からすると面白いのは面白いのだが、「ネタ」を探し当てるとに些か苦労させられることも多かった。

早々に「洛陽道」を仕上げ、次の「長安道」に入るべく空いた時間を見付けては少しずつ類書を眺めたり辞書を引いてみたりそれなりに努力したのだが、なかなか思うようにならなかった。後世の歴史家は二〇二〇年をどのような年であったと記述するのだろうか。ごく当たり前だった日常生活様式がこんなにも急激に変化してしまおうとは。大学も、と言うか、人が多く集まる場である大学だからこそやはり大きな変化を強いられた。幸いなことに、個人的には研究室の出入りは比較的自由にできたのだが、オンライン授業の実施に予想していたよりも遙かに多くの時間を費やすことになり、思わぬ時間を取られることになった。備忘のために記しておきたい。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府詩集』（中華書局 一九七九）である。

### 陳・徐陵「洛陽道」二首其一

【本文及び書き下し】

- 1 緑柳三春暗 緑柳 三春 暗く
- 2 紅塵百戯多 紅塵 百戯 多し
- 3 東門向金馬 東門 金馬に向かひ
- 4 南陌接銅駝 南陌 銅駝に接す
- 5 華軒翼葆吹 華軒 葆吹翼け
- 6 飛蓋響鳴珂 飛蓋 鳴珂響く
- 7 潘郎車欲滿 潘郎 車 満ちんと欲し
- 8 無奈擲花何 花を擲つを奈何ともする無し

【日本語訳】

- 1 春になりヤナギの葉が青々と茂って仄暗く
- 2 曲馬団が砂埃を盛んに舞い上げています
- 3 洛陽の上東門では銅で鑄た馬と向かい合うことになり
- 4 南側の道では銅のラクダが迎えてくれます
- 5 富貴の方がお乗りになる馬車には鳥の羽が飾られた車と楽隊が左右でお伴をしておられ
- 6 車を飛ばすように走らせると馬のくつわを飾る玉が涼やかに鳴り響きます
- 7 潘岳さまの車にはもう果物がいっぱい満ちて
- 8 花を投げ入れようにもどうしようありません

【校勘】

○『徐孝穆集』卷一・『文苑英華』卷百九十二・『古詩紀』卷百十

8 「花」、『英華』作「如」。

【押韻】

「多」「駝」「珂」「何」、下平七歌韻。

【作者】

五〇七～五八三。梁、陳に仕えた文人。字は孝穆、東海郡郟（山東省）の人。父の徐摛は庾信の父庾肩吾とともに梁の太子蕭綱（後、簡文帝）の文学サロンを代表する文人であり、「宮体詩」の形成に大きな影響を与えた。徐陵も蕭綱に優遇され、その命を受けて『玉台新詠』を編集した。北朝に使いしている間に梁が滅びたが、苦難の末に南帰し、陳に仕え吏部尚書など高官を歴任して政治的にも重きを成した。また文壇の領袖として庾信と名を齊しくし「徐庾体」と称された。『玉台新詠』序など文章でも優れた作品を残している。

【語釈】

1 緑柳三春暗 2 紅塵百戯多

「緑柳」若葉が青々と茂る春のヤナギ。宋・謝靈運「從遊京口北固山詔」詩（『文選』卷二十二）に「原隰黃緑

柳、墟囿散紅桃（原隰 緑柳 萋み、墟囿 紅桃 散ず）」とあり、梁元帝蕭繹「洛陽道」にも「青槐随幔扠、緑柳逐風低（青槐 幔に随ひて扠ひ、緑柳 風を逐ひて低る）」とあった。

「三春」孟春、仲春、季春の三ヶ月、春をいう。嵇康「琴賦」（『文選』卷十八）に「夫三春之初、麗服以時。（夫れ三春の初め、麗服 時を以てす。）」とあり、李善注は漢・班固「終南山賦」に「三春之季、孟夏之初、天氣肅清、周覽八隅。（三春の季、孟夏の初め、天氣 肅清にして、八隅を周覽す。）」、また梁元帝「纂要」に「一時三月謂之三春、九十日謂之九春。（一時三月 之れを三春と謂ひ、九十日 之れを九春と謂ふ。）」とあるのを引く。詩では謝靈運「登石門最高頂」詩（『文選』卷二十二）に「心契九秋幹、目翫三春萋（心は九秋の幹に契り、目は三春の萋を翫ぶ）」と。

「暗」葉が生い茂って日の光を遮る。庾肩吾「三日侍蘭亭曲水宴」詩に「桃花舒玉潤、柳葉暗金溝（桃花 玉潤に舒び、柳葉 金溝に暗し）」とあり、陳後主「洛陽道」五首其四にも「柳花塵裏暗、槐色露中光（柳花 塵裏に暗く、槐色 露中に光る）」とあった。

「紅塵」馬や馬車がたてる砂埃。都会の喧噪をいう。班固「西都賦」（『文選』卷一）に「紅塵四合、煙雲相連。

（紅塵 四合し、煙雲 相ひ連なる。）」とあり、李善注は「李陵詩曰、『紅塵塞天地、白日何冥冥。』（李陵詩に曰く、『紅塵 天地を塞ぎ、白日 何ぞ冥冥たる』

と。）」とする。陳・張正見「洛陽道」にも「紅塵暮不息、相看連騎稀（紅塵 暮れに息まず、相ひ看る 連騎の稀なるを）」と見える。

「百戯」様々な芸能の総称。語は『後漢書』安帝紀に「乙酉、罷魚龍曼延百戯。（乙酉、魚龍曼延百戯を罷む。）」と見え、李賢注に「漢官典職』曰、『作九賓樂。舍利之獸從西方來、戲於庭、入前殿、激水化成比目魚、嗽水作霧、化成黃龍、長八丈、出水遨戲於庭、炫耀日光。』（漢官典職』に曰く、『九賓樂を作る。舍利の獸 西方より來たり、庭に戯れ、前殿に入り、水を激して化して比目魚と成り、水を嗽ぎて霧を作り、化して黃龍と成り、長さ八丈、水より出でて庭に遨戲し、日光に炫耀す』と。）」とある。詩では何遜「擬輕薄篇」に「相期百戯旁、去來三市側（百戯の旁に相ひ期し、三市の側に去來す）」と見える。

3 東門向金馬 4 南陌接銅駝

「東門」洛陽城の東の門。洛陽城の東側の最も北にあつた門。『後漢書』百官志四に「城門每門候一人、六百石。本注曰、雒陽城十二門、其正南一門曰平城門、北宮門、屬衛尉。其余上西門、雍門、広陽門、津門、小苑門、開陽門、耗門、中東門、上東門、穀門、夏門、凡十二門。（城門 門毎に候一人、六百石。本注 曰く、雒陽城の十二門、其の正南の一門を平城門と曰ひ、北宮門、衛尉に屬す。其の余は上西門、雍門、広陽門、津門、

小苑門、開陽門、耗門、中東門、上東門、穀門、夏門、凡そ十二門。」とその名が見える。阮籍「詠懷」詩八十二首其十一(『文選』卷二十三)「步出上東門、北望首陽岑(歩みて上東門を出で、北のかた首陽の岑を望む)」とあり、李善注が引く『河南郡図經』に「東に三門有り、最も北頭を上東門と曰ふ。」とある。また「古詩十九首」(『文選』卷二十九)其十三にも「驅車上東門、遙望郭北墓(車を上東門に駆り、遙かに郭北の墓を望む)」とあるように、この門を出ると王侯貴族の墓がある北芒山が眺められた。

〔金馬〕銅で鑄た馬。『史記』滑稽列伝に「金馬門者、宦者署門也。門傍有銅馬、故謂之曰金馬門。(金馬門は、宦者署の門なり。門の傍らに銅馬有り、故に之れを謂ひて金馬門と曰ふ。)」とある。金馬門は略して金門とも。楊雄「解嘲」(『文選』卷四十五)に「今吾子幸得遭明盛之世、処不諱之朝、与群賢同行、歷金門、上玉堂有日矣。(今 吾子 幸ひに明盛の世に遭ひ、不諱の朝に処り、群賢と行を同じくし、金門を歴て、玉堂に上るを得ること日有り。)」とある。長安と結び付きの強い語だが、ここは都城であることを表現したのだから。

〔南陌〕南側の道。梁・沈約「鼓吹曲同諸公賦・臨高台」に「所思竟何在、洛陽南陌頭(思ふ所は竟に何くにか在る、洛陽 南陌の頭)」とあり、梁武帝蕭衍「河中之水歌」(『玉台』卷九作「無名氏」)に「河中之水向

東流、洛陽女兒名莫愁。莫愁十三能織綺、十四采桑南陌頭(河中の水 東に向かひて流れ、洛陽の女兒 莫愁と名づく。莫愁 十三にして能く綺を織り、十四にして桑を南陌の頭に采る)」とあるように、莫愁のような若く美しい女性が桑と採るところとして設定される。陳後主「洛陽道」に「佳麗嬌南陌、香氣含風好(佳麗 南陌に嬌として、香氣 風の好きを含む)」とあった。〔銅駝〕洛陽城内にあった繁華街の名。道の両脇に銅で鑄た二頭の駝の像があつたことによる。晋・陸機「洛陽記」に「洛陽有銅駝街、漢鑄銅駝二枚、在宮南四会道相對。俗語曰、『金馬門外集衆賢、銅駝陌上集少年』。(洛陽に銅駝街有り、漢の鑄したる銅駝二枚、宮の西南に在り四会の道に相ひ対す。俗語に曰く、『金馬門外 衆賢集ひ、銅駝陌上 少年集ふ』と。)(『太平御覽』卷百五十八)とある。

#### 5 華軒翼葆吹 6 飛蓋響鳴珂

〔華軒〕財産や地位に恵まれた人が乗る豪華な車。阮籍「詠懷」詩八十二首其六十に「履履詠南風、緇袍笑華軒(履履 『南風』を詠じ、緇袍 華軒を笑ふ)」と見える。また、梁・江淹「雜体詩」三十首(『文選』卷三十一)「左記室 詠史 思」に「金張服貂冕、許史乘華軒(金張 貂冕を服し、許史 華軒に乗る)」とあり、李善注は『漢書』劉向伝に「向遂上封事極諫曰、『…』。今王氏一姓乘朱輪華轂者二十三人、…』。(向 遂に

封事を上り極めて諫めて曰く、『…』。今 王氏一姓 朱輪華轂に乗る者二十三人、…』と。』とあるのを引く。

〔翼〕左右にあつて輔佐する。

〔葆吹〕葆車と鼓吹。葆車は鳥の羽で車蓋を飾った車。

『後漢書』光武帝紀下に「益州伝送公孫述警師・郊廟樂器・葆車・輿輦、於是法物始備。(益州 公孫述の警師・郊廟の樂器・葆車・輿輦を伝送し、是に於いて法物 始めて備はる。)」とあり、李賢注に「葆車謂上建羽葆也。合聚五采羽名為葆。(葆車は上に羽葆を建つるを謂ふなり。五采の羽を合聚するを名づけて葆と為す。)」という。鼓吹、ここは「華軒」の左右にあつて樂曲を演奏する樂隊を指す。梁簡文帝蕭綱『昭明太子集』序に「胡香翼蓋、葆吹從風。(胡香 蓋を翼け、葆吹 風に從ふ。)」とあり、梁・陸罩「奉和往虎窟山寺」詩に「葆吹臨風遠、旌羽映九旂(葆吹 風に臨んで遠く、旌羽 九旂映ず)」と見える。

〔飛蓋〕車を飛ぶように走らせる。「蓋」は車の覆い、転じて車そのものを指す。三国魏・曹植「公宴」詩(『文選』卷二十)に「清夜遊西園、飛蓋相追隨(清夜に西園に遊び、蓋を飛ばして相ひ追隨す)」と。また、梁・江淹「雜体詩三十首」(『文選』卷三十一)「左記室 詠史 思」に「太平多歡娛、飛蓋東都門(太平 歡娛多く、蓋を飛ばす 東都門)」とある。また、葆車と同じく鳥の羽で飾った車とも。

〔鳴珂〕身分の高い人が乗る馬のくつわを飾る玉。馬が走ると涼やかな音で鳴る。「珂」は貝殻から作った白い飾り。『西京雜記』卷二に「武帝時、…長安始盛飾鞍馬、競加雕鏤。或一馬之飾直百金。皆以南海白蜃為珂、紫金為華、以飾其上。(武帝の時、…長安 始めて盛んに鞍馬を飾り、競ひて雕鏤を加ふ。或いは一馬の飾り 直 百金。皆南海の白蜃を以て珂と為し、紫金を華と為して、以て其の上を飾る。)」梁・何遜「車中見新林分別甚盛」詩に「隔林望行幘、下阪聽鳴珂(林を隔てて行幘を望み、阪を下りて鳴珂を聴く)」と見える。

#### 7 潘郎車欲滿 8 無奈擲花何

〔潘郎〕潘岳。二句は、簡文帝蕭綱「洛陽道」にも「玉車爭曉入、潘果溢高箱(玉車 争ひて曉に入り、潘果 高箱に溢る)」とあったように、『晋書』潘岳伝に「婦人遇之者、皆連手縈繞、投之以果、遂滿車而帰。(婦人 之れに遇へば、皆な手を連ねて縈繞し、之れに投ずるに果を以てし、遂に車に満ちて帰る。)」と見える故事による。

〔車欲滿〕婦人たちに投げ込まれた果物で車が溢れそうになる。『世說新語』容止に「潘岳妙有姿容、好神情。少時、挾弹出洛陽道、婦人遇者、莫不連手共縈之。(潘岳 妙にして姿容有り、神情好し。少き時、彈を挾みて洛陽の道に出づるに、婦人の遇ふ者、手を連ねて

共に之れに榮はざる莫し。」と『晋書』と同じような話を載せ、劉孝標注引『語林』に「安仁至美、每行、老嫗以果擲之、滿車。(安仁 至美、行く毎に、老嫗果を以て之れに擲ち、車に滿つ。）」とある。「無奈く何」くをどうすることもできない。

### 陳・徐陵「洛陽道」二首其二

【本文及び書き下し】

- 1 洛陽馳道上 洛陽 馳道の上
- 2 春日起塵埃 春日 塵埃起こる
- 3 濯龍望如霧 濯龍 望めば霧の如く
- 4 河橋度似雷 河橋 度れば雷に似る
- 5 聞珂知馬蹀 珂を聞きて馬の蹀むを知り
- 6 傍幘見覺開 幘に傍ひて覺の開くを見る
- 7 相看不得語 相ひ看るも語るを得ず
- 8 密意眼中来 密意 眼中より来たる

### 【日本語訳】

- 1 洛陽の天子がお通りになる道に
- 2 この春の日、砂埃が舞い上がっています
- 3 濯龍池は砂埃が立ち籠めて霧が懸かったみたいにとぼんやりとしか見えませんが
- 4 河橋からは橋を渡る車の音が雷のように響いて来ます
- 5 くつわの飾り玉の音を耳にして馬が近くまで歩いて来たのが分かりました

6 砂埃の中、車のほろのすぐ向こう側に宮殿の瓦屋根が見えました

7 お互いに姿を見ても言葉を交わすことはできませんが

8 深い思いは眼の中から溢れ出ています

### 【校勘】

○『徐孝穆集』卷一・『文苑英華』卷百九十二・『古詩紀』

卷百十

- 3 「霧」、底本注・本集注並云「一作『水』。『英華』作「水」、而注云「一作『霧』」。
- 6 「幘」、『英華』作「幔」。

### 【押韻】

「埃」「開」「来」、上平十六哈韻。「雷」、上平十五灰韻。灰・哈同用。

### 【語釈】

#### 1 洛陽馳道上 2 春日起塵埃

「馳道」天子の車が通る道。『礼記』曲礼下に「歳凶、年穀不登、君膳不祭肺、馬不食穀、馳道不除、祭事不具。(歳 凶にして、年穀 登らざれば、君 膳に肺を祭らず、馬 穀を食はず、馳道 除はず、祭事 具せず。）」とあり、孔穎達疏に「馳道、正道。如今之御路也。是君馳走車馬之处、故曰馳道也。(馳道、正道なり。今の御路の如きなり。是れ君の車馬を馳走するの处、故に

馳道と曰ふなり。）」という。また、宋・鮑照「代君子有所思」(『文選』卷三十一。『鮑氏集』作「代陸平原君主有所思行」)に「層閣肅天居、馳道直如髮(層閣肅として天居のごとく、馳道 直きこと髮の如し)」とあって、李善注は『漢書』成帝紀に「上嘗急召、太子出龍樓門、不敢絶馳道。(上 嘗て急に召すに、太子

龍樓門を出で、敢へて馳道を絶たず。）」とあり、顏師古注が引く応劭の説に「馳道、天子所行道也、若今之中道。(馳道、天子の行く所の道なり、今の中道の若し。）」とあるのを引く。

「春日」春。『詩経』豳風・七月に「春日載陽、有鳴倉庚(春日 載めて陽かく、鳴く倉庚有り)」と。

「塵埃」砂埃。梁・丘遲「贈何郎」詩に「向夕秋風起、野馬雜塵埃(向夕 秋風 起ち、野馬 塵埃に雜ふ)」と見える。

### 3 濯龍望如霧 4 河橋度似雷

「濯龍」園の名、或いは池の名。『後漢書』明德馬皇后紀に「帝幸濯龍中。(帝 濯龍中に幸す。）」とあり、李賢注に「『統漢志』曰、『濯龍、園名也。近北宮。』(『統漢志』に曰く、『濯龍、園の名なり。北宮に近し』と。）」という。また、漢・張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「濯龍芳林、九谷八溪。(濯龍 芳林、九谷 八溪あり。))」とあり、薛綜注に「『洛陽図経』曰、『濯龍、地名。故歌曰、『濯龍望如海、河橋渡似雷』。(『洛陽図経』に

曰く、『濯龍、地名なり。故歌に曰く、『濯龍 望めば海の如く、河橋 渡れば雷に似る』と。))」とある。二句はこの故歌に基づくようである。

「如霧」霧のように形が判然としない。齊・王融「芳樹」に「相望早春日、煙華雜如霧(相ひ望む 早春の日、煙華 雜りて霧の如し)」と。

「河橋」陳後主「洛陽道」五首其三にも「忘情伊水側、稅駕河橋傍(情を忘る 伊水の側、駕を税く 河橋の傍)」とあった。晋の杜預が黄河に架けた橋の名。河南省孟県の西南、孟津県の東北にあった。漢魏の洛陽城から見て東北に当たる。梁・蕭子暉「応教使君春遊」詩に「上林看草色、河橋望日暉(上林に草色を看、河橋に日暉を望む)」のように都と関係の深い地名として現れる。

### 5 聞珂知馬蹀 6 傍幘見覺開

「聞珂」馬のくつわ飾りの響きを耳にして。前詩にも「華軒翼葆吹、飛蓋響鳴珂(華軒 葆吹翼け、飛蓋 鳴珂響く)」とあった。

「馬蹀」馬が進むこと。「蹀」、こは馬が歩くこと。宋・謝莊「從駕頓上」詩に「冀馬依風蹀、辺籥当夜聞(冀馬 風に依りて蹀み、辺籥 夜に当たりて聞こゆ)」とある。

「傍幘」車のすぐ側に控える。「幘」、車のカーテン、転じて車を指す。潘岳「藉田賦」(『文選』卷七)に「微

風生於輕幃兮、織埃起於朱輪。(微風 輕幃に生じ、織埃 朱輪に起こる。)とある。また、右にも引いた何遜「車中見新林分別甚盛」詩にも「隔林望行幃、下阪聽鳴珂(林を隔てて行幃を望み、阪を下りて鳴珂を聴く)」と「珂」「幃」の対がある。

【葦開】建ち並ぶ宮殿が姿を現す。「葦」は瓦葺きの屋根。ここは洛陽城中の宮殿をいう。左思「吳都賦」(『文選』卷五)に「長干延屬、飛薨舛互。(長干 延属し、飛薨舛互す。)」とあり、劉逵注は「飛薨舛互、言室屋之多相連下之貌。(飛薨 舛互すとは、室屋の多くして相ひ連なりて下るの貌を言ふ。)」という。「開」は、砂埃の中から姿を現すことと解してみた。

### 7 相看不得語 8 密意眼中來

【相看】互いに見つめ合う。張正見「洛陽道」にも「紅塵暮不息、相看連騎稀(紅塵 暮れに息まず、相ひ看る 連騎の稀なるを)」と見える。

【不得語】言葉をお互に交わすことができない。「古詩十九首」其十に「河漢清且淺、相去復幾許。盈盈一水間、脈脈不得語(河漢 清くして且つ淺し、相ひ去ること 復た幾許ぞ。盈盈たる一水の間、脈脈として語るを得ず)」と天の川を挟んだ牽牛と織女との様子を描く場面に見える。

【密意】ひそやかな情愛。例としてはやや遅れるが隋・盧思道「日出東南隅行」に「深情出艷語、密意滿橫眸

(深情 艷語に出で、密意 横眸に満つ)」と見える。「眼中來」眼に現れる。「眼中」の語は晋・陸雲「答張士然」詩(『文選』卷二十五)に「感念桑梓城、髣髴眼中人(桑梓の城を感念し、眼中の人を髣髴す)」と見える。

### 陳・岑之敬「洛陽道」

【本文及び書き下し】

- 1 喧喧洛水浜 喧喧たり 洛水の浜
- 2 鬱鬱小平津 鬱鬱たり 小平津
- 3 路傍桃李節 路傍 桃李の節
- 4 陌上採桑春 陌上 桑を採るの春
- 5 聚車看衛玠 車を聚めて衛玠を看
- 6 連手望安仁 手を連ねて安仁を望む
- 7 復有能留客 復た能く客を留むる有り
- 8 莫愁嬌態新 莫愁 嬌態 新たななり

【日本語訳】

- 1 にぎやかな洛水のほとり
- 2 人でごった返す小平津
- 3 路の側らに桃李が咲き誇る時節
- 4 道の側で秦羅敷が桑の葉を採る春
- 5 人々が参集しては衛玠を眺め
- 6 婦人たちが手を繋いで潘岳を望む
- 7 その上、人々に帰るのを忘れさせる
- 8 初々しくも艶やかな様子の莫愁がいる

### 【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二・『古詩紀』卷百十六  
0 「岑之敬」、底本作「岑敬之」、而底本卷二十二「折楊柳」亦作「岑敬之」、注云「抛『陳書』卷三四・『詩紀』卷一〇六改」。今從之。

1 「水」、『英華』作「川」、注云「一作『水』」。

### 【押韻】

「浜」「津」「仁」「新」、上平十七真韻。「春」、上平十八諄韻。真・諄同用。

### 【作者】

五一九く五七九。字は思礼、南陽棘陽(河南省南陽市)の人。梁武帝の中大通六(五三四)年、武帝に拔擢され、以後晋安王の中記室などを勤めた。陳宣帝の太建(五六九く五八二)の初め、東宮義省学士を授けられ、南台詔書侍御などを歴任した。今に残る詩は四首、いずれも『樂府詩集』に収められる。

### 【語釈】

#### 1 喧喧洛水浜 2 鬱鬱小平津

「喧喧」人の声や物の音がにぎやかで騒がしい。梁・何遜「学古、贈丘永嘉征還」詩に「結客蔥河返、喧喧動四隣(客を結びて蔥河より返り、喧喧として四隣を動か

す)」とある。誼誼とも。梁・吳均「戰城南」に「陌上何誼誼、匈奴困塞垣(陌上 何ぞ誼誼たる、匈奴塞垣を囲む)」(「誼誼」、『文苑英華』卷百九十六作「喧喧」)と。  
【洛水】今の洛河。黄河の支流のひとつ。陝西省洛南県を発し、河南省鞏義で黄河と合流する。漢・楊雄「羽獵賦」(『文選』卷八)に「鞭洛水之宓妃、餉屈原与彭胥。(洛水の宓妃を鞭うち、屈原と彭胥とに餉る。)」と見える。陳・江総「洛陽道」二首其一にも「德陽穿洛水、伊闕適河橋(德陽 洛水を穿ち、伊闕 河橋に適し)」とある。また、庾肩吾「洛陽道」には「微道臨河曲、層城傍洛川(微道 河曲に臨み、層城 洛川に傍ふ)」と「洛川」の名で現れる。

【鬱鬱】人が大勢いてにぎやかな様。漢・無名氏「古詩為焦仲卿妻作」(『玉台』卷一)に「從人四五百、鬱鬱登郡門(從人 四五百、鬱鬱として郡門に登る)」と。

【小平津】黄河に設けられた関所の名。今の河南省孟津県の東北にあった。『後漢書』靈帝紀に「置八関都尉官。

(八関都尉の官を置く。)」とあり、李賢注に「八関は謂函谷・広城・伊闕・大谷・轅轅・旋門・小平津・孟津也。(八関は函谷・広城・伊闕・大谷・轅轅・旋門・小平津・孟津を謂ふなり。)」という。吳均「携手曲」(『玉台』卷六)に「鷄鳴上林苑、薄暮小平津(鷄鳴には上林苑、薄暮には小平津)」と。

### 3 路傍桃李節 4 陌上採桑春

〔路傍〕道の傍ら。漢・宋子侯「董嬌饒」〔玉台〕卷一）に「洛陽城東路、桃李生路傍。……不知誰家子、提籠行採桑（洛陽 城東の路、桃李 路傍に生ず。……知らず 誰が家の子ぞ、籠を提げて行ゆく桑を採る）」とあるのに拠る。

〔桃李節〕桃李が花を咲かせる時節。鮑照「學劉公幹体」詩〔文選〕卷三十一）に「艷陽桃李節、皎潔不成妍（艷陽 桃李の節、皎潔 妍を成さず）」とある。

〔陌上〕道の傍ら。やはり桑を採る美しい女性が登場する場。相和曲に属する古楽府に「陌上桑」があり、晋・崔豹『古今注』音楽に「陌上桑」、出秦氏女子。秦氏、邯鄲人、有女名羅敷、為邑人千乘王仁妻。王仁後為趙王家令。羅敷出採桑於陌上、趙王登台、見而悦之、因飲酒欲奪焉。羅敷乃彈箏、乃作『陌上歌』以自明焉。〔陌上桑〕、秦氏の女子に出づ。秦氏、邯鄲の人、女有り 羅敷と名づけ、邑人 千乗の王仁の妻と為る。王仁 後に趙王の家令と為る。羅敷 出でて桑を陌上に採るに、趙王 台に登り、見て之れを悦び、因りて酒を飲まして焉れを奪はんと欲す。羅敷 乃ち箏を弾き、乃ち『陌上歌』を作りて以て自ら明らかにす。』という。

〔採桑〕養蚕のために桑の葉を採取する。右に引いた「董嬌饒」「陌上桑」、或いは「秋胡行」などの物語詩で男女が出逢うきっかけとなる春の行事として描かれる。

### 5 聚車看衛玠 6 連手望安仁

〔聚車〕車を集める。多くの人が参集すること。ここは『晋書』衛玠伝に「玠字叔宝。年五歳、風神秀異。祖父瑾曰、『此兒有異於衆、顧吾年老、不見其成長耳』。総角乘羊車入市、見者皆以為玉人、觀之者傾都。（玠字は叔宝。年 五歳にして、風神 秀異。祖父瑾 曰く、『此の兒 衆に異なる有り、顧だ吾 年 老いたれば、其の成長するを見ざらんのみ』と。総角して羊車に乗りて市に入れば、見る者 皆な以為へらく 玉人なりと、之れを觀る者 都を傾く。）」と都中の人が集まったという故事に拠る。

〔衛玠〕二八六〇三一二。西晋の人。右に引いたように美男子として知られる。

〔連手〕手を繋ぐ。『晋書』潘岳伝に「岳美姿儀…少時挾弹出洛陽道。婦人遇之者、皆連手縈繞、投之以果、遂滿車而歸。（岳 姿儀美にして…、少き時 弾を挾みて洛陽道に出づ。婦人 之れに遇へば、皆な手を連ねて縈繞し、之れに投ずるに果を以てし、遂に車に満ちて歸る。）」とあるのに拠る。

〔安仁〕潘岳の字。

### 7 復有能留客 8 莫愁嬌態新

〔留客〕人を引き留めて帰るのを忘れさせる。『楚辞』大招に「長袂扞面、善留客只（長袂 面を扞ひ、善く客

を留む）」とあり、王逸注に「言美女工舞、揄其長袖、周旋屈折、扞拭人面、芬香流衍、衆客喜舞、留不能去也。（美女の舞ひを工みにし、其の長袖を揄るひ、周旋屈折して、人面を扞拭し、芬香 流衍して、衆客 喜舞して、留まりて去る能はざるを言ふなり。）」という。六朝詩では梁・費昶「和蕭洗馬画屏風」詩二首〔玉台〕卷六）其一「陽春發和氣」に「扞袖当留客、相逢莫相難（袖を扞へば 当に客を留むべし、相ひ逢へば 相ひ難きこと莫し）」と。

〔莫愁〕洛陽出身の美しい女性。梁・武帝蕭衍「河中之水歌」〔玉台〕卷九作「無名氏」。に「河中之水向東流、洛陽女兒名莫愁。莫愁十三能織綺、十四采桑南陌頭（河中之水 東に向かひて流れ、洛陽の女兒 莫愁と名づく。莫愁 十三にして能く綺を織り、十四にして桑を南陌の頭に採る）」とある。

〔嬌態〕美しい女性の艶めかしい様子。梁簡文帝蕭綱「詠舞」詩二首其一に「逐節工新舞、嬌態似凌虛（節を逐ひて新舞を工みにし、嬌態 凌虚を凌ぐに似る）」と。

### 陳・張正見「洛陽道」

【本文及び書き下し】

- 1 曾城啓旦扉 曾城 旦扉啓ひらき
- 2 上洛滿春暉 上洛 春暉満みつ
- 3 柳影縁溝合 柳影 溝に縁りて合し
- 4 槐花夾路飛 槐花 路を夾みて飛ぶ

- 5 蘇合彈珠罷 蘇合 珠を弾き罷やみ
- 6 黃間負翳婦 黃間 翳かげを負ひて婦むる
- 7 紅塵暮不息 紅塵 暮れに息やまず
- 8 相看連騎稀 相ひ看る 連騎の稀なるを

### 【日本語訳】

- 1 朝、洛陽のりっぱな建物の門扉が開き
- 2 洛水のの上流辺りには春の日の輝きが満ち溢れる
- 3 ヤナギのシルエツトが宮中の水路に沿って重なり合い
- 4 エンジュの花が道の両側で散っていく
- 5 蘇合の香を混ぜた弾丸を弾き飛ばすのを止めて
- 6 黄間の弩に用いる矢を入れた箱を背負って家路を急ぐ
- 7 暮れになっても馬や車が立てる砂埃は収まらないが
- 8 ふと見れば、取り巻き連中を乗せた騎馬はほとんどいなくなっていた

### 【校勘】

- 『文苑英華』卷百九十二・『漢魏六朝百三家集』・『古詩紀』卷百十二
- 2 「洛」、『詩紀』作「路」。
  - 3 「縁」、『英華』作「緑」。
  - 4 「夾路」、『詩紀』作「夾岸」。原注云「一作『岸』」、底本注云、「夾路」、『詩紀』卷一〇二・『百三家集』都作「夾岸」、与「縁溝」相応、似勝」。

【押韻】「扉」「暉」「飛」「帰」「稀」、上平八微韻。

【作者】生没年不詳。梁、陳に仕えた。字は見蹟、清河の東武城（山東省東武城の西北）の人。梁の簡文帝が東宮にあつた時、年十三にして頌を獻じて大いに賞賛された。梁末の喪乱の際には匡俗山（廬山のこと）に難を避けたが、陳の武帝が即位（五五七年）するに及び、詔によつて都建康に召還され、宣帝の太建（五六九～五八二）中に没した。時に年四十九。『陳書』三十四・『南史』七十二に伝がある。『陳書』本伝には「其五言詩尤善、大行於世。

（其の五言詩 尤も善し、大いに世に行はる。）と評するが、南宋・嚴羽は『滄浪詩話』考証で「南北朝人惟張正見詩最多、而最無足省發。所謂『雖多亦奚以為』。（南北朝の人 惟だ張正見の詩のみ最も多くして、最も省發するに足る無し。所謂『多しと雖も亦た奚を以て為さん。』）」と酷評する。道坂昭広氏の「良くも悪くも陳の文学の一面を象徴する詩人である。」（興膳宏編『六朝詩人伝』大修館書店 二〇〇〇）という評が公平なところだと思ふ。

### 【語釈】

#### 1 會城啓且扉 2 上洛滿春暉

【會城】都、また都のりっぱな建物。「層城」とも。陸機

「贈尚書郎顧彦先」二首（『文選』卷二十四）其二「朝遊遊層城、夕息旋直廬（朝に遊ばんとして層城に遊び、夕べに息はんとして直廬に旋る）」と。楊明校箋『陸機集校箋』（上海古籍出版社 二〇一六）には「層城、疑是晉宮城内樓觀名、在南宮太極殿左近。潘尼『桑樹賦』、『倚増城之飛觀、弘綺窓之疏寮。』層城即増城。（層城、疑ふらくは是れ晋の宮城内の樓觀の名ならん、南宮太極殿の左近に在り。潘尼『桑樹賦』に、『増城の飛觀に倚り、綺窓の疏寮を払ふ』と。層城は即ち増城なり。）」という。庾肩吾「洛陽道」にも「徹道臨河曲、層城傍洛川（徹道 河曲に臨み、層城 洛川に傍ふ）」とあつた。

【啓且扉】朝を迎えた宮殿の門扉が開く。「且扉」の語、六朝詩には他の用例は見当たらない。曹植「五遊詠」に「闔闔啓丹扉、双闕曜朱光（闔闔 丹扉啓き、双闕 朱光曜く）、陳・顧野王「陽春歌」に「春草正芳菲、重樓啓曙扉（春草 正に芳菲として、重樓 曙扉啓く）」と見える。

【上洛】地名。洛水の主流、今の陝西省商洛市の辺り。六朝詩にはあまり見当たらないが、北周・庾信「奉報寄洛州」詩に「上洛逢都尉、商山見逸民（上洛 逢都尉に逢ひ、商山 逸民を見る）」とある。

【滿春暉】春の太陽の光に満ちている。「春暉」の語は晋・陸機「短歌行」（『文選』卷二十八）に「蘋以春暉、蘭以秋芳（蘋は春を以て暉き、蘭は秋を以て芳し）」と見

えるが、ここは晋・陸雲「答吳王上將顧処微」詩九章其六に「豈無春暉、茲焉可榮（豈に春暉無くして、茲に焉くんぞ榮くべけんや）」とある用法。また、梁簡文帝蕭綱「洛陽道」に「洛陽佳麗所、大道滿春光（洛陽 佳麗の所、大道 春光満つ）」とあつた。

#### 3 柳影縁溝合 4 槐花夾路飛

【柳影】ヤナギのゆらゆら揺れるシルエット。梁簡文帝蕭綱「傷離新体」詩に「柳影長橫路、槐枝深隱人（柳影 長くして路に横たはり、槐枝 深くして人を隠す）」と見えるが、六朝詩の用例はそれほど多くない。

【溝】ここは「御溝」の意。宮中の庭園を流れる水路。齊・謝朓「鼓吹曲」（『文選』卷二十八。『謝宣城集』作「入朝曲」。）に「飛甍夾馳道、垂楊蔭御溝（飛甍 馳道を夾み、垂楊 御溝を蔭む）」と。

【槐花】エンジュの花。初夏、黄色い花が咲く。張正見には「帝王所居篇」に「柳葉飄緹騎、槐花影屬車（柳葉 緹騎に飄り、槐花 屬車に影る）」との用例がある。「柳」と「槐」との組み合わせは「洛陽道」では梁元帝蕭繹の作に「青槐隨幔幘、綠柳逐風低（青槐 幔に隨ひて幘ひ、綠柳 風を逐ひて低る）」、陳後主の五首其四に「柳花塵裏暗、槐色露中光（柳花 塵裏に暗く、槐色 露中に光る）」と見えたが、いずれも槐の葉の色を取り上げていた。

【夾路】道の両側。『太平御覽』卷百九十五に引く晋・陸

機「洛陽記」に「宮門及城中大道皆分作三。中央御道、兩辺築土牆、高四尺余、外分之。唯公卿尚書章服、道從中道。凡人皆行左右、左入右出。夾道種榆槐樹。此三道四通五達也。（宮門及び城中の大道 皆な分ちて三と作す。中央の御道、兩辺に土牆を築き、高さ四尺余、外に之れを分く。唯だ公卿尚書のみ章服し、道中道に從ふ。凡人 皆な左右を行き、左は入り右は出づ。道を夾みて榆槐の樹を種う。此の三道 四通五達するなり。）」との記述が見える。また、三国魏・曹操「苦寒行」（『文選』卷二十七）に「熊羆對我蹲、虎豹夾路啼（熊羆 我に対して蹲り、虎豹 路を夾みて啼く）」と。

#### 5 蘇合彈珠罷 6 黃間負鬚婦

【蘇合】香の名。小アジア原産の喬木から採れる。ここは蘇合香と泥とを混ぜ合わせて作った弾丸。漢・無名氏「烏生」古辭に「秦氏家有遊遨蕩子、工用睢陽蘇合彈（秦氏の家に遊遨の蕩子有り、工みに睢陽の蘇合の弾を用ふ）」とあり、梁簡文帝蕭綱「艷歌篇」（『玉台』卷七）に「左把蘇合彈、旁持大屈弓（左に蘇合の弾を把り、旁らに大屈の弓を持す）」と見える。

【彈珠】弾で弾丸を弾く。この「弾」は動詞。六朝詩にはあまり見当たらないが、張正見には「白頭吟」に「彈珠金市側、抵玉春山東（珠を弾く 金市の側ら、玉を抵つ 春山の東）」との用例がある。



「黄間」弩の名。漢・張衡「南都賦」(『文選』卷四)に「駃驥奔騰、黄間機張。(駃驥、鑣を齊しくし、黄間、張る。)とあり、李善注は『漢書』李広伝に「広乃令持滿毋發、而広身自以大黄射其裨將、殺数人、胡虜益解。(広、乃ち滿を持して發する母からしめて、広身、自ら大黄を以て其の裨將を射、数人を殺し、胡虜、益ます解く。)」とあるのを引く。顔師古は晋灼の説を引き「黄肩即黄間也。大黄、其大者也。(黄肩は即ち黄間なり。大黄、其の大なる者なり。)」という。詩では晋・張華「遊獵篇」に「由基控繁弱、公差操黄間(由基、繁弱を控き、公差、黄間を操る)」と見える。「負翳」矢を入れる箱を背負う。六朝詩には他の用例は見当たらない。「翳」は「医」の仮借字。『説文解字』十二篇下・匸部に「医、盛弓弩矢器也。从匸从矢。『国語』曰『兵不解医』。(医、弓弩の矢を盛る器なり。匸に从ひ矢に从ふ。『国語』に曰く『兵、医を解かず』と。)」とあり、段玉裁注に「『齐語』文。今『国語』作『翳』。段借字。『齐語』の文。今『国語』『翳』に作る。段借字なり。」とある。

### 7 紅塵暮不息 8 相看連騎稀

「紅塵」徐陵「洛陽道」二首其一「紅塵百戲多」【語釈】参照。

「暮不息」夕暮れ時になっても収まらない。梁・王籍「權歌行」に「輕機暮不息、復逐夜潮上(輕機、暮れに息

まず、復た夜潮を逐ひて上る)」と。  
「連騎」お伴の騎馬。分を越えた贅沢をする成金たちをいう。張衡「西京賦」(『文選』卷二)に「擊鍾鼎食、連騎相過。(鍾を撃ちて鼎食し、騎を連ねて相ひ過る。)」とあり、李善注は『漢書』貨殖伝に「故秦楊以田農而甲一州、翁伯以販脂而傾鼎邑、張氏以売醬而隲修、質氏以洒削而鼎食、濁氏以胃脯而連騎、張里以馬医而擊鍾、皆越法矣。(故に秦楊は田農を以てして一州に甲たり、翁伯は脂を販ふを以てして鼎邑を傾け、張氏は醬を売るを以てして隲修し、質氏は洒削を以てして鼎食し、濁氏は胃脯を以てして騎を連ね、張里は馬医なるを以てして鍾を撃つ、皆な法を越えたり。)」とあるのを「食貨志」に誤つて引く。張正見には「怨詩」に「蓋影分連騎、衣香合並車(蓋影、連騎を分かち、衣香並車に合ふ)」との用例がある。

### 陳・陳暄「洛陽道」

【本文及び書き下し】

- 1 洛陽九達上 洛陽 九達の上
- 2 羅綺四時春 羅綺 四時 春なり
- 3 路傍避驄馬 路傍に驄馬を避け
- 4 車中看玉人 車中に玉人を見る
- 5 鎮西歌艷曲 鎮西 艷曲を歌ひ
- 6 臨淄逢麗神 臨淄 麗神に逢ふ
- 7 欲知双壁価 双壁の価を知らんと欲す

8 潘夏正連茵 潘・夏 正に茵を連ぬ

### 【日本語訳】

- 1 洛陽の都大路
- 2 うすぎぬやあやぎぬを身にまとった美しい男女が溢れ、春も夏も秋も冬も春のよう
- 3 道の脇に侍御史様の車をよけ
- 4 車の中にいらつしやる玉のように美しい人を見る
- 5 謝尚はあでやかな「大道曲」を歌い
- 6 曹植は洛水の美しい女神に出逢った
- 7 二つの玉にどれほどの価値があるのかを知りたければ
- 8 潘岳と夏侯湛が同じ車に乗り合せているのをご覧なさい

### 【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二・『古詩紀』卷百十六  
1 「達」、底本原作「達」、注云「一作『衢』。『英華』注同。底本注云「拋『詩紀』卷一〇六改」。

### 【押韻】

「春」、上平十八諄韻。「人」「神」「茵」、上平十七真韻。真・諄同用。

### 【作者】

生没年不詳。後主が東宮にあつた時、招かれて学士と

なり、即位すると江総・孔範らと禁中での宴席に侍り、狎客と呼ばれた。至徳末(五八五頃)、後主からひどい扱いを受け慥死した。詩四首が現存し、いずれも『樂府詩集』に収める。

### 【語釈】

#### 1 洛陽九達上 2 羅綺四時春

「九達」四方八方に繋がる道。都大路。『三輔黄図』都城十二門に『三輔決録』を引き、「長安城、面三門、四面十二門、皆通達九達、以相經緯。(長安城、面三門、四面十二門、皆な九達に通達し、以て相ひ経緯す。)」とあり、何遜「擬輕薄篇」に「長安九達上、青槐蔭道植(長安、九達の上、青槐、道を蔭ひて植はる)」とあるように元々は長安の大路を指していたが、後に広く都大路をいうようになった。陳後主「洛陽道」五首、其四に「百尺瞰金埒、九衢通玉堂(百尺、金埒を瞰、九衢、玉堂に通ず)」とあつた「九衢」と同じような意味である。

「羅綺」うすぎぬとあやぎぬ。きらびやかな衣裳をいい、更に着飾った美しい女性をいう。張衡「西京賦」に「始徐進而羸形、似不任乎羅綺。(始め徐ろに進みて羸形、羅綺に任へざるに似る。)」と見え、詩では梁・費昶「華光省中夜聞城外擣衣」詩(『玉台』卷六)に「昨暮庭槐落、今朝羅綺薄(昨暮、庭槐、落ち、今朝、羅綺、薄し)」とある。

「四時」春夏秋冬の四季。「古詩十九首」其十二「四時更變化、歲暮一何速（四時 更もも變化し、歲暮 一に何ぞ速やかなる）」とあり、李善注は『周易』恒卦象伝に「四時變化而能久成。（四時 變化して能く久しく成る。）」とあるのを引く。

### 3 路傍避驄馬 4 車中看玉人

「路傍」岑之敬「洛陽道」にも「路傍桃李節、陌上採桑春（路傍 桃李の節、陌上 桑を採るの春）」とあった。「避驄馬」侍御史（監察官）を避ける。「後漢書」桓典伝に「辟司徒袁隗府、举高第、拜侍御史。是時宦官秉權、典執政无所回避。常乘驄馬、京師畏憚、為之語曰、『行且止、避驄馬御史』。（司徒袁隗の府に辟され、高第に挙げられ、侍御史に拜せらる。是の時 宦官 權を乗るも、典 政を執りて回避する所無し。常に驄馬に乗り、京師 畏れ憚り、之れが語を為して曰く、『行き行きて且く止まり、驄馬の御史を避く』と。）」と見える故事による。「驄馬」は白い毛と黒い毛の混じった馬。羣毛。鮑照「結客少年場行」（『文選』卷二十八）に「驄馬金絡頭、錦帶佩吳鉤（驄馬 金絡頭、錦帶 吳鉤を佩ぶ）」とある。また、吳均「入蘭台贈王治書僧孺」詩に「相思非不深、行行避驄馬（相ひ思ひて深からざるに非ず、行き行きて驄馬を避く）」と見える。

「玉人」美貌の人。ここは岑之敬「洛陽道」の第5句「聚車看衛玠」の【語釈】で引いた『晋書』衛玠伝に見え六朝詩には他の用例は見当たらない。「洛神賦」序（『文選』卷十九）に「黄初三年、余朝京師、還濟洛川。古人有言、斯水之神、名曰宓妃。感宋玉对楚王神女之事、遂作斯賦。（黄初三年、余 京師に朝し、還りて洛川を濟る。古人 言へる有り、斯の水の神、名づけて宓妃と曰ふ。宋玉の楚王に神女の事をおふるに感じ、遂に斯の賦を作る。）」（六臣本、「玉」字下有「説」）と。

### 7 欲知双璧価 8 潘夏正連茵

「双璧」ふたつの美しい玉。ここは二人の美男の比喩。六朝詩には他の用例は見当たらない。「連璧」に同じ。『世説新語』容止に「潘安仁・夏侯湛並有美容、喜同行、時人謂之『連璧』。（潘安仁・夏侯湛 並びに美容有り、喜びて同行くに、時人 之れを『連璧』と謂ふ。）」と見える故事に拠る。夏侯湛（二四三〜二九一）は西晋の政治家、文人。字は孝若。「連茵」車の敷物を共にする。これも六朝詩には他の用例は見当たらない。

### 陳・王瑳「洛陽道」

【本文及び書き下し】

- 1 洛陽夜漏尽 洛陽 夜漏 尽き
- 2 九重平旦開 九重 平旦に開く
- 3 日照蒼龍闕 日は照らす 蒼龍の闕
- 4 煙遶鳳凰台 煙は遶る 鳳凰の台

た故事に基づく。

### 5 鎮西歌艷曲 6 臨淄逢麗神

「鎮西」東晋の謝尚（三〇八〜三五七）をいう。謝鯤の子、東晋初期の功臣謝安の従兄。音律に精通し、舞踏を善くした。鎮西將軍であつたことから謝鎮西と称された。

「歌艷曲」樂府「大道曲」を作つた。「艷曲」は艷歌と同じく男女の情愛を描く樂曲。六朝詩には他の用例は見当たらない。『樂府詩集』卷七十五に謝尚の「大道曲」を載せ、その解題が引く『樂府広題』に「謝尚為鎮西將軍、嘗著紫羅襦、抛胡牀。在中中仏国門楼上彈琵琶、作『大道曲』。市人不知是三公也。（謝尚 鎮西將軍と為り、嘗に紫羅襦を著け、胡牀に抛る。市中の仏国門の楼上に在りて琵琶を弾き、『大道曲』を作る。市人は三公なるを知らざるなり。）」とある。「大道曲」は「青陽二三月、柳青桃復紅。車馬不相識、音落黃埃中（青陽 二三月、柳 青く 桃 復た紅なり。車馬 相ひ識らず、音 黄埃の中に落つ）」という短い詩だが、「艷曲」と呼べるかどうか。「大道」という題と「音落黃埃中」の句から「洛陽道」と結び付けられたのだろう。

「臨淄」山東省淄博市。春秋戦国斉の都。ここは建安十九（二一四）年に臨淄侯に封じられた曹植をいう。「逢麗神」「洛神賦」を作つた。「麗神」は美しい女神。

- 5 浮雲翻似蓋 浮雲 翻りて蓋に似て
- 6 流水到成雷 流水 到りて雷を成す
- 7 曹王鬪鷄返 曹王 鷄を鬪はせて返り
- 8 潘仁載果来 潘仁 果を載せて来たる

### 【日本語訳】

- 1 洛陽城では夜用の水時計で計る時間が終わり
- 2 明け方、九重の門が開かれる
- 3 朝日が蒼龍で飾られた宮門を明るく輝かせ
- 4 朝靄が鳳凰の飾りのある楼台の辺りに漂う
- 5 浮雲はひらひらと行き交う馬車の傘に似て
- 6 流れる水のように見える馬車の流れは雷ほどの大きな音を鳴り響かせる
- 7 曹植が鬪鷄の遊びから帰って来るし
- 8 潘岳が車に果物をいっぱい載せてやって来る

### 【校勘】

- 『文苑英華』卷百九十二・『古詩紀』卷百十六
- 6 「到」、『英華』作「倒」。

### 【押韻】

「開」「台」「来」、上平十六咍韻。「雷」、上平十五灰韻。灰・哈同用。

### 【作者】

生没年未詳。陳の文人。陳の後主の時、官は散騎常侍に至る。江総、孔範等とともに狎客の一人に数えられ、『南史』恩倖列伝には「刻薄貪鄙、忌害才能」と評される。陳が滅びると隋の文帝よって僻遠の地に追放された。現存する詩は三首。いずれも『樂府詩集』に収める。

#### 【語釈】

### 1 洛陽夜漏尽 2 九重平旦開

〔夜漏〕夜の時間をはかる水時計。転じて夜の時間。「漏」は「漏壺」「漏刻」、水時計のこと。『説文解字』十一篇上二・水部に「漏、以銅受水、刻節、晝夜百刻。从水扇声。（漏、銅を以て水を受け、節を刻み、晝夜百刻。）とある。また、『周礼』春官・鷄人に「大祭祀、夜呼旦以詔百官。（大祭祀に、夜旦を呼びて以て百官を詔す。）とあり、鄭玄注に「夜夜漏未尽、鷄鳴時也。（夜とは夜漏未だ尽きずして、鷄の鳴く時なり。）」という。また、梁・陸倕「新刻漏銘」序（『文選』卷五十六）に「揆景測辰、徹宮戒井、守以水火、分茲日夜。（景を揆り辰を測り、宮を徹り井を戒め、守るに水火を以てし、茲の日夜を分かつ。）とあり、李善注は衛宏『漢書儀』を引いて「晝漏尽、夜漏起、宮中衛宮城門擊刁斗、周廬擊木柝。（晝漏 尽きて、夜漏 起これば、宮中に宮を衛り城門に刁斗を撃ち、周廬は木柝を撃つ。）といる。詩では庾肩吾「奉和春夜応令」詩に「烧香知夜漏、刻燭驗更籌（香を焼きて夜漏を知り、

あつたものだが、ここは都城の宮殿の意で用いるのである。詩では呉均「贈柳秘書」詩に「已蔽蒼龍門、又影鳳皇闕（已に蒼龍門を蔽ひ、又た鳳皇闕に影す）」と。

〔煙遶〕靄が掛かる。梁元帝蕭繹「和劉尚書兼明堂齋宮」詩に「香浮鬱金酒、煙繞鳳凰樽（香は浮かぶ 鬱金の酒、煙は繞る 鳳凰の樽）」と見える。

〔鳳凰台〕都城の美しい楼台。多くの書物に多くの「鳳凰台」の名が見られる。「鳳台」とも。『列仙伝』蕭史に「蕭史者、秦穆公時人也。善吹簫、能致孔雀白鶴於庭。穆公有女、字弄玉、好之。公遂以女妻焉。日教弄玉作鳳鳴、居数年、吹似鳳声。鳳凰来止其屋。公為作鳳台、夫婦止其上、不下数年、一旦皆随鳳凰飛去。（蕭史は、秦の穆公の時の人なり。善く簫を吹き、能く孔雀・白鶴を庭に致す。穆公に女あり、字は弄玉、之れを好む。公 遂に女を以て妻す。日ひ弄玉に鳳鳴を作すを教へ、居ること数年、吹くこと鳳声に似たり。鳳凰 来たりて其の屋に止まる。公 為に鳳台を作るに、夫婦 其の上に止まり、下らざること数年、一旦 皆な鳳凰に随ひて飛び去る。）とある。詩では、張正見「門有車馬客行」に「舞袖飄金谷、歌声遶鳳台（舞袖 金谷に 飄り、歌声 鳳台を遶る）」と見える。「蒼龍闕」も「鳳凰台」も洛陽と直接関わるわけではないが、「蒼龍」は『楚辞』九弁に「左朱雀之茝茝兮、右蒼龍之躍躍（朱雀の茝茝たるを左にし、蒼龍の躍躍たる

燭を刻みて更籌を驗す）」と見える。

〔九重〕九重の門。転じて宮中をいう。天子の居処には九重の門があるとされたことから。『楚辞』九弁に「豈不鬱陶而思君兮、君之門以九重（豈に鬱陶として君を思はざらんや、君の門は以て九重なり）」と。車轂「洛陽道」にも「洛陽道八達、洛陽城九重（洛陽 道は八達、洛陽 城は九重）」と見えた。

〔平旦〕早朝、明け方。『孟子』告子上に「其日夜之所息、平旦之氣、其好惡与人相近也者幾希。（其の日夜の息ふ所、平旦の氣あるも、其の好悪 人と相ひ近き者幾ど希なり。）と見える。ここは鮑照「放歌行」（『文選』卷二十八。本集作「代放歌行」。）に「鷄鳴洛城裏、禁門平旦開（鷄 洛城の裏に鳴き、禁門 平旦に開く）」とあるのを意識すると思われる。

### 3 日照蒼龍闕 4 煙遶鳳凰台

〔日照〕太陽がを輝かせる。曹植「雜詩」七首其一（『文選』卷二十九）に「高台多悲風、朝日照北林（高台 悲風多く、朝日 北林を照らす）」と。

〔蒼龍闕〕都城の美しい宮殿。「闕」は王宮の門前の左右にある高殿。陸倕「石闕銘」（『文選』卷五十六）に「蒼龍玄武之製、銅雀鉄鳳之工。（蒼龍・玄武の製、銅雀・鉄鳳の工。）とあり、李善注は『三輔旧事』を引いて「未央宮東有蒼龍闕、北有玄武闕。（未央宮の東に蒼龍闕有り、北に玄武闕有り。）とあつて、元々は長安に

を右にす）」とあるように、「鳳凰」と同様に瑞祥とされたことから、都城の宮殿の名として取り上げられたのだろう。

### 5 浮雲翻似蓋 6 流水到成雷

〔浮雲翻似蓋〕浮雲が風に翻つて車の傘に似る。魏文帝曹丕「雜詩」二首（『文選』卷二十九）に「西北有浮雲、亭亭如車蓋（西北に浮雲有り、亭亭として車蓋の如し）」とあるのに拠るだろう。しかし、この発想は逆で、洛陽道を往來する車の傘が浮雲のようだというのだろう。

〔流水〕流れる水。ここは道を往來する馬車。『後漢書』明德馬皇后紀に「前過濯龍門上、見外家問起居者、車如流水、馬如游龍、倉頭衣緑袴、領袖正白、顧視御者、不及遠矣。（前に濯龍門の上を過ぎ、外家の起居を問ふ者を見るに、車は流水の如く、馬は游龍の如く、倉頭は緑袴を衣て、領袖は正に白く、顧みて御者を視るに、及ばざること遠し。）と見える故事に拠る。

〔成雷〕雷のような大きな音をたてる。木華「海賦」（『文選』卷十二）に「翻動成雷、擾翰為林。（翻動して雷を成し、擾翰して林を為す。）とあり、李善注は『漢書』中山靖王劉勝伝に「夫衆煦漂山、聚蚊成雷、朋党執虎、十夫桡椎。是以文王拘於羑里、孔子阨於陳・蔡。此乃烝庶之成風、増積之生害也。（夫れ衆煦も山を漂はせ、聚蚊も雷を成し、朋党 虎を執り、十夫 椎を桡む。

是を以て文王 牖里に拘らはれ、孔子 陳・蔡に陋しめり。此れ乃ち烝庶の風を成し、之れを増積して害を生ずるなり。」とあるのを引く。その顔師古注に「言衆蚊飛声有若雷也。(衆蚊の飛声 雷の若き有るを言ふなり。)」という。六朝詩には他の用例は見当たらない。

## 7 曹王鬪鷄返 8 潘仁載果来

「曹王」曹植をいう。見慣れない表現だが、梁・戴暠「月重輪行」に「婕妤比团扇、曹王警洛神(婕妤は团扇に比し、曹王は洛神に譬ふ)」との用例がある。

「鬪鷄返」鬪鷄の遊びから帰る。「鬪鷄」は鷄を闘わせる賭博。曹植「名都篇」(『文選』卷二十七)に「鬪鷄東郊道、走馬長楸間(鷄を闘はず 東郊の道、馬を走らす 長楸の間)」とあるのに基づく。李善注は『漢書』眭弘伝に「眭弘字孟、魯国蕃人也。少時好俠、鬪鷄走馬。(眭弘 字は孟、魯国の蕃人なり。少き時俠を好み、鷄を闘はせ馬を走らす。)」とあるのを引く。

「潘仁」潘岳。字が安仁であることによるのだろうが、六朝詩では他の用例は見当たらない。曹植と潘岳を対にした例は沈約「宿東園」詩(『文選』卷二十二)に「陳王鬪鷄道、安仁采樵路(陳王 鬪鷄の道、安仁 采樵の路)」と見えるが、こちらの潘岳は隱者のイメージで描かれる。

「載果来」「載果」の語、六朝詩では他の用例は見当たらないが、やはり徐陵「洛陽道」二首其一に「潘郎車欲

滿、無奈擲花何(潘郎 車 満ちんと欲し、花を擲つを奈何ともする無し)」などと見えた故事に拠る。

## 陳・江綵「洛陽道」二首其一

【本文及び書き下し】

- |         |                               |
|---------|-------------------------------|
| 1 德陽穿洛水 | 德陽 洛水に穿たれ                     |
| 2 伊闕邇河橋 | 伊闕 河橋に邇し                      |
| 3 仙舟李膺權 | 仙舟 李膺の權 <small>みづかち</small>   |
| 4 小馬王戎鑣 | 小馬 王戎の鑣 <small>くまづち</small>   |
| 5 杏堂歌吹合 | 杏堂に歌吹 合ひ                      |
| 6 槐路風塵饒 | 槐路に風塵 饒 <small>ゆた</small> かなり |
| 7 緑珠含淚舞 | 緑珠 涙を含みて舞ひ                    |
| 8 孫秀強相邀 | 孫秀 強ひて相ひ邀 <small>むか</small> ふ |

【日本語訳】

- 1 德陽殿の下には洛水が流れ
- 2 伊闕は河橋からほど近い
- 3 河には李膺が權を操る仙人の舟
- 4 洛陽の城内には王戎の乗った小さな馬
- 5 宮中の杏間堂皇では歌声と楽器の音が調和し
- 6 エンジュの植えられた道には風が巻き上げる土埃が立ち籠める
- 7 緑珠が頬に涙をこぼしながら舞っているのは
- 8 孫秀が無理矢理に呼び寄せようとしたからだ

## 【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二・『古詩紀』卷百十四

7 「含」、『英華』作「銜」。

8 「強」、『英華』『詩紀』并作「彊」。

## 【押韻】

「橋」「鑣」「饒」、下平四宵韻。「邀」、下平三蕭韻。蕭・宵同用。

## 【作者】

五一九〜五九四。六朝後期の文人。梁、陳、隋に仕えた。字は綵持。濟陽郡考城(河南省蘭考県)の人。名門に生まれ、十八歳で武陵王蕭紀の法曹參軍として初めて出仕した。後、梁の武帝にその詩才を高く評価された。太清二(五四八)年、徐陵とともに東魏への使者に扱ばれたが、病気を理由に辞退した。間もなく侯景の乱が起こり都建康が陥落すると、江綵は会稽へ、さらに嶺南へと難を避け、以後十数年を広州で過ごした。陳の天嘉四(五六三)年、文帝により中書侍郎として召還され、文帝、宣帝に仕えた。五八三年、後主が即位すると江綵はその信任を得て高官を歴任し、至徳四(五八六)年には尚書令(宰相)となった。江綵は宰相の位にあつても政治に関与せず、後主と日夜酒宴を張り詩文を作つて楽しむばかりで、陳後主の「狎客」とされ、亡国の一因となつたことを批判される。禎明三(五八九)年、隋が陳を

滅ぼすと、隋に仕え上開府となり、開皇十四(五九一)年に卒した。

江綵は亡国の臣としてその政治姿勢を非難されることが多いが、宮廷詩人として活躍し、艶麗な作風が大いにもてはやされた。一方、熱心な仏教信者であつたため、山中の仏寺を訪れた際の作品をいくつか残しており、そこには優れた山水描写が見られる。今、百首あまりが伝わる。

## 【語釈】

### 1 德陽穿洛水 2 伊闕邇河橋

「德陽」後漢の宮殿の名。張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「乃新崇徳、遂作徳陽。(乃ち崇徳を新たにし、遂に徳陽を作る。)」とあり、薛綜注に「崇徳・徳陽、皆殿名也。崇徳在東、徳陽在西、相去五十歩。(崇徳・徳陽、皆な殿の名なり。崇徳 東に在り、徳陽 西に在り、相ひ去ること五十歩。)」という。崇徳殿と徳陽殿とが五十歩を隔てて並び立っていたことと、「伊闕」が二つの山が向かい合った形であることとを対にした。

「穿洛水」洛水を跨ぐ。『後漢書』礼儀志中に「举觴御坐前。司空奉羹、大司農奉飯、奏食举之樂。百官受賜宴饗、大作樂。(觴を御坐の前に挙ぐ。司空 羹を奉じ、大司農 飯を奉じ、食举の樂を奏す。百官 賜を受け宴饗して、大いに楽しみを作す。)」とあり、劉昭注が蔡質『漢儀』を引いて「德陽殿周旋容万人。陸高二丈、

皆文石作壇。激沼水於殿下。(德陽殿は周旋 万人を容る。陛 高さ二丈、皆な文石もて壇を作る。沼水を殿下に激す。)という。德陽殿が建物の下に水が引いてある構造だったことをいうのだろう。

「伊闕」洛陽の南にある岩山の名。晋の頃、洛陽四関の一つとされた。植木久行編『中国詩跡事典』(二〇一五 研文出版)に「龍門(伊闕)洛陽市の南郊約一三

陵の地にある、黒ずんだ石灰岩からなる岩山の名。：。龍門は、北流する伊水の兩岸にそそりたつ西山(龍門山、海拔二六三呎と東山(香山、海拔三〇三呎)からなる(両山を総称して『龍門山』『伊闕山』などともいう)。古代の聖天子・禹が開鑿した場所の一つと伝え、その形が闕(宮門の一種)と似ているため、『伊闕』(伊水の宮闕の意)ともいう。」との解説がある。鮑照「結客少年場行」(『文選』卷二十八)に「升高臨四関、表裏望皇州(高きに升りて四関に臨み、表裏に皇州を望む)」とあり、李善注は陸機『洛陽記』を引いて「洛陽有四関。東成皋、南伊闕、北孟津、西函谷。(洛陽に四関有り。東は成皋、南は伊闕、北は孟津、西は函谷なり。)」という。

「河橋」徐陵「洛陽道」二首其二に「濯龍望如霧、河橋度似雷(濯龍 望めば霧の如く、河橋 度れば雷に似る)」とあった。その【語釈】参照。陳後主「洛陽道」五首其三に「忘情伊水側、稅駕河橋傍(情を忘る 伊水の側、駕を税く 河橋の傍)」、洛陽の東北に位置し

して出游し、見る者 其の三公なるを知らざるなり。)と見える故事に拠る。王戎(二三四〜三〇五)は西晋の政治家。竹林の七賢の一人。

「鑣」くつわ。謝靈運「從遊京口北固亭詔」詩(『文選』卷二十二)に「昔聞汾水游、今見塵外鑣(昔 聞く 汾水の游、今 見る 塵外の鑣)」とある。

### 5 杏堂歌吹合 6 槐路風塵鑣

「杏堂」洛陽宮にあった「杏間堂皇」のことだろう。『太平御覽』卷百七十六・居処部四に引く『洛陽記』(『御覽』が引く『洛陽記』には、華延嵩『洛陽記』、陸機『洛陽記』、楊龍驤『洛陽記』があるが、こゝはどれか分からない。)に「洛陽宮有桃間堂皇・杏間堂皇・柰間堂皇・竹間堂皇・李間堂皇・魚梁堂皇・醴泉百戲堂皇有之。」と見える。「堂皇」は四面に壁のない堂。詩では梁・劉孝綽「発建興渚示到陸二黃門」詩に「猶聞棗下吹、尚識杏間堂(猶ほ聞く 棗下の吹、尚ほ識る 杏間堂)」、北周・王褒「九日從駕」詩に「高旆長椒坂、緹幕杏間堂(高旆長椒坂、緹幕 杏間堂)」と見える。

「歌吹」歌声と楽器の音。鮑照「蕪城賦」(『文選』卷十一)に「塵間撲地、歌吹沸天。(塵間 地を撲くし、歌吹 天に沸く。)」とある。

「槐路」傍らにエンジュが植えられた都大路。「洛陽道」

ていたので、「伊闕」から「遷」いとは言えないかもしれない。

### 3 仙舟李膺權 4 小馬王戎鑣

「仙舟李膺」李膺と郭泰の二人だけが乗り河に浮かんだ舟が、仙人の乗った舟のように思われた。『後漢書』郭太伝に「郭太字林宗、太原界休人也。家世貧賤。：。乃游於洛陽。始見河南尹李膺、膺大奇之、遂相友善。於是名震京師。後歸鄉里、衣冠諸儒送至河上、車數千兩。林宗唯与李膺同舟而濟、衆賓望之、以為神仙焉。(郭太 字は林宗、太原界休の人なり。家 世よ貧賤なり。：。乃ち洛陽に遊ぶ。始めて河南尹李膺に見ゆるや、膺 大いに之れを奇とし、遂に相ひ友善す。是に於いて名 京師に震ふ。後 郷里に帰らんとするに、衣冠諸儒の送りにて河の上に至るもの、車 數千兩。林宗 唯だ李膺と舟を同じくして濟り、衆賓 之れを望み、以て神仙と為す。)」と見える故事に拠る。郭泰は後漢の名儒。范曄は父の諱を避けて郭太と表記した。李膺は後漢の官僚。『後漢書』党錮伝に本伝がある。「仙舟」の語は庾肩吾「乱後経夏禹廟」詩に「仙舟還入鏡、玉軸更乘空(仙舟 還た鏡に入り、玉軸 更に空に乗る)」と。

「小馬王戎」小さな馬に乗った王戎が三公のように見えなかった。『晋書』王戎伝に「間乘小馬、從便門而出游、見者不知其三公也。(間かに小馬に乗り、便門より

にはしばしば「槐」が描かれていた。梁元帝蕭繹の作に「青槐随幔扈、緑柳逐風低、陳後主の五首其四に「柳花塵裏暗、槐色露中光」、其五に「青槐夾馳道、御水映銅溝」、張正見の作には「柳影縁溝合、槐花夾路飛」とあり、「柳」と対にされることが多かった。「槐路」の語は梁元帝蕭繹「長安道」に「雕鞍承赭汗、槐路起紅塵(雕鞍 赭汗を承け、槐路 紅塵起こる)」と見える。「風塵」風に吹き上げられる土埃。陸機「為顧彦先贈婦」詩二首(『文選』卷二十四) 其一に「京洛多風塵、素衣化為緇(京洛 風塵多く、素衣 化して緇と為る)」と。

### 7 緑珠含淚舞 8 孫秀強相邀

「緑珠」晋の石崇の愛妾。二句は『晋書』石崇伝に「及賈謐誅、崇以党与免官。時趙王倫專權、崇甥歐陽建与倫有隙。崇有妓曰緑珠、美而艶、善吹笛。孫秀使人求之。崇時在金谷別館、方登涼台、臨清流、婦人侍側。使者以告。崇尽出其婢妾數十人以示之、皆蘊蘭麝、被羅縠。曰、『在所挾』。使者曰、『君侯服御麗則麗矣、然本受命指索緑珠、不識孰是』。崇勃然曰、『緑珠吾所愛、不可得也』。使者曰、『君侯博古通今、察遠照邇。願加三思』。崇曰、『不然』。使者出而又反、崇竟不許。秀怒、乃勸倫誅崇・建。崇・建亦潜知其計、乃与黃門郎潘岳陰勸淮南王允・齊王冏以凶倫・秀。秀覺之、遂矯詔收崇及潘岳・歐陽建等。崇正宴於楼上、介士到門。

崇謂綠珠曰、『我今為爾得罪』。綠珠泣曰、『当效死於官前』。因自投于楼下而死。崇曰、『吾不過流徙交・広耳』。及車載詣東市、崇乃歎曰、『奴輩利吾家財』。收者答曰、『知財致害、何不早散之』。崇不能答。崇母兄妻子無少長皆被害、死者十五人、崇時年五十二。(賈誼の誅せらるるに及びて、崇、党与を以て官を免ぜらる。時に趙王倫、権を専らにし、崇の甥歐陽建、倫と隙有り。崇に妓有りて綠珠と曰ひ、美にして艶、善く笛を吹く。孫秀、人をして之れを求めしむ。崇、時に金谷の別館に在りて、方に涼台に登り、清流に臨み、婦人側らに待す。使者、以て告ぐ。崇、尽く其の婢妾數十人を出だして以て之れに示すに、皆な蘭麝を糝らせ、羅縠を被る。曰く、『扱ぶ所に在り』と。使者、曰く、『君侯の服御、麗は則ち麗、然れども本と命を受くるは指して綠珠を索むれば、孰か是れなるかを識らず』と。崇、勃然として曰く、『綠珠は吾れの愛する所にして、得べからざるなり』と。使者、曰く、『君侯は古に博くして今に通じ、遠きを察して邇きを照らす。願はくは三思を加へんことを』と。崇、曰く、『然らず』と。使者、出でて又た反るも、崇、竟に許さず。秀、怒りて、乃ち倫に崇・建を誅せんことを勸む。崇・建も亦た潜かに其の計を知り、乃ち黃門郎潘岳と陰かに淮南王允・齊王冏に勸めて以て倫・秀を凶らんとす。秀之れを覺り、遂に詔を矯りて崇及び潘岳・歐陽建等を取む。崇、正に楼上に宴するに、介士、門に到る。崇

- 2 長秋聽五鐘 長秋に五鐘を聴く
- 3 玉節迎司隸 玉節 司隸迎へ
- 4 錦車帰濯龍 錦車 濯龍に帰る
- 5 弦歌声不息 弦歌 声 息まず
- 6 環佩響相從 環佩 響き 相ひ從ふ
- 7 花障蕩舟笑 花は障る 舟を蕩かすの笑ひを
- 8 日映下山逢 日は映ず 山を下りて逢ふに

【日本語訳】

- 1 小平津では道が四方へ通じ
- 2 天子がお出ましになったのか、長秋殿で五鐘の音に耳を傾ける
- 3 玉の割り符を奉じた使者の帰りは首都警察長官が出迎え
- 4 女性の使者が乗った錦の車が濯龍門に帰って来た
- 5 音楽による教化が行き届いているのか、琴瑟に和した歌声が止むことはなく
- 6 后妃の徳のおかげで女性たちの腰に帯びた玉飾りが次々に響いて来る
- 7 ここ洛陽では舟遊びを楽しむ女性たちの笑顔は花がさえぎってしまひ
- 8 山を下りてきた奥ゆかしい女性をお日様が明るく照らし出すのだ

【校勘】

綠珠に謂ひて曰く、『我、今、爾の為に罪を得たり』と。綠珠、泣きて曰く、『当に死を官前に效すべし』と。因りて自ら楼下に投じて死せり。崇、曰く、『吾、交・広に流徙するに過ぎざるのみ』と。車、載せて東市に詣るに及び、崇、乃ち歎じて曰く、『奴輩、吾家の財を利せん』と。收者、答へて曰く、『財、害を致すを知らば、何ぞ早に之れを散ぜざる』と。崇、答ふる能はず。崇の母兄妻子、少長と無く皆な害を被り、死者、十五人、崇、時に年、五十二。(一)と見える故事に拠る。詩では謝朓「贈王主簿」詩二首(「玉台」卷四)其二に「清吹要碧玉、調弦命綠珠(清吹、碧玉を要へ、調弦、綠珠に命ず)」と見える。

〔含淚〕涙が口元までこぼれる。梁・王僧孺「為何庫部舊姬擬藤蕪之句」詩(「玉台」卷六)「新人含笑近、故人含淚隱(新人は笑みを含みて近づき、故人は含淚を含みて隠る)」と。

〔孫秀〕? 三百一。西晋の政治家。八王の乱を起こした八王の一人である司馬倫の寵臣。

〔強相邀〕無理矢理に招き寄せる。晋・無名氏「長干曲」に「逆浪故相邀、菱舟不怕搖(逆浪、故に相ひ邀へ、菱舟、揺るを怕れず)」と。

陳・江総「洛陽道」二首其二  
【本文及び書き下し】  
1 小平路四達 小平に 路 四達し

- 『文苑英華』卷百九十二・『古詩紀』卷百十四
- 1 「路」、「英華」作「臨」、而注云「一作『路』」。『詩紀』注云、「一作『臨』」。底本注云、「『英華』卷一九二作『臨』、似是」。
  - 2 「秋」、「英華」『詩紀』皆作「楸」。「鐘」、「英華」作「鍾」。
  - 8 「逢」、「英華」作「蓬」。

【押韻】

「鐘」「龍」「從」「逢」、上平三鍾韻。

【語釈】

- 1 小平路四達 2 長秋聽五鐘
- 〔小平〕小平津をいう。岑之敬「洛陽道」に「喧喧洛水濱、鬱鬱小平津」とあつたように河南八閤の一つ。
- 〔四達〕四方に通じる道。或いは四方に広がる。『爾雅』積宮に「一達謂之道路、二達謂之歧旁、三達謂之劇旁、四達謂之衢。(一達、之れを道路と謂ひ、二達、之れを歧旁と謂ひ、三達、之れを劇旁と謂ひ、四達、之れを衢と謂ふ。)」とある。宋・謝瞻「張子房」詩(『文選』卷二十一)に「四達雖平直、蹇步愧無良(四達、平直なりと雖も、蹇歩にして良きこと無きを愧づ)」と見え、李善注は『礼記』樂記に「若此則周道四達、礼樂交通。(此くの若くにして則ち周道、四達し、礼樂、交通す。)」とあるのを引く。

〔長秋〕漢代の宮殿の名。『三輔黃圖』漢宮に「長樂宮」有長信・長秋・永壽・永寧四殿。高帝居此宮、後太后常居之。（長樂宮）に長信・長秋・永壽・永寧の四殿有り。高帝 此の宮に居り、後 太后 常に之れに居る。」とあるが、六朝詩にはあまり用例が見当たらない。「長秋」であれば、背の高いヒサギ。右にも引いた曹植「名都篇」に「鬪鷄東郊道、走馬長秋間（鷄を鬪はず 東郊の道、馬を走らす 長秋の間）」とあり、李周翰注に「古人種楸於道、故曰『長楸』。（古人 楸を道に種う、故に『長楸』と曰ふ。）というように街路樹としてよく植えられた樹木である。

〔五鐘〕天子のお出ましを知らせる五つの鐘。班固「東都賦」（『文選』卷一）に「於是発鯨魚、鏗華鐘。（是に於いて鯨魚を發し、華鐘を鏗く。）」とあり、李善注は『尚書大伝』に「天子左五鐘、天子將出、則撞黃鐘、右五鐘皆應。（天子の左 五鐘、天子 將に出でんとすれば、則ち黃鐘を撞き、右の五鐘 皆な応ず。）」とあるのを引く。

### 3 玉節迎司隸 4 錦車煇濯龍

〔玉節〕玉で作られた符節。文字が刻まれた札を二つに割って、当事者たちが別々に所有しておいたのを、後日その二つを合わせて証拠にした。ここは外国に赴いていた使者。『周礼』地官・掌節に「守邦国者用玉節、守都鄙者用角節。（邦国を守る者は玉節を用ひ、都鄙を

守る者は角節を用ふ。）」とある。詩では梁元帝蕭繹「藩難未静述懷」詩に「玉節威雲夢、金鉦韻渚宮（玉節雲夢を威し、金鉦 渚宮に韻あり）」と見える。

〔司隸〕漢の官名、司隸校尉。都周辺の治安を掌る。『漢書』百官公卿表上に「司隸校尉、周官。武帝征和四年初置。持節、從中都官、徒千二百人、捕巫蠱、督大姦猾。（司隸校尉、周官。武帝の征和四年 初めて置く。節を持し、中都官に從ひ、徒 千二百人、巫蠱を捕らへ、大姦猾を督す。）」と見える。詩では梁・劉孝威「行還值雨又為清道所駐」詩に「廻車避司隸、俄軒揖內郎（車を廻らして司隸を避け、俄軒 内郎に揖す）」と。

〔錦車〕女性の使者が乗る錦で覆った車。『漢書』西域伝下・烏孫国に「馮夫人錦車持節、詔烏就屠詣長羅侯赤谷城、立元貴靡為大昆彌、烏就屠為小昆彌、皆賜印綬。（馮夫人 錦車して節を持し、烏就屠に詔して長羅侯の赤谷城に詣らしめ、元貴靡を立てて大昆彌と為し、烏就屠を小昆彌と為して、皆な印綬を賜ふ。）」とあるのに拠る。顔師古は服虔の説を引き「錦車、以錦衣車也。（錦車、錦を以て車に衣ふなり。）」という。詩では劉孝威「思婦引」に「錦車勞遠駕、繡衣疲屢奔（錦車 遠駕を勞ひ、繡衣 屢しば奔るに疲る）」と。

〔濯龍〕濯龍門。徐陵「洛陽道」二首其二にも「濯龍望如霧、河橋度似雷（濯龍 望めば霧の如く、河橋 度れば雷に似る）」とあったが、ここは王瑳「洛陽道」第6句「流水到成雷」の【語釈】に引いた『後漢書』明

徳馬皇后紀に「前過濯龍門上、見外家問起居者、車如流水、馬如游龍、倉頭衣綠袴、領袖正白、顧視御者、不及遠矣。（前に濯龍門の上を過ぎ、外家の起居を問ふ者を見るに、車は流水の如く、馬は游龍の如く、倉頭は綠袴を衣て、領袖は正に白く、顧みて御者を見るに、及ばざること遠し。）」と見える濯龍門だろう。明徳馬皇后も陰皇太后に「馬貴人徳冠後宮、即其人也。（馬貴人 徳 後宮に冠たり、即ち其の人なり。）」と評され、賢夫人として知られる。

### 5 弦歌声不息 6 環佩響相從

〔弦歌〕琴瑟が奏でる音楽に合わせて歌われる歌声。ここは音楽による教化が行き届いていることを表す。『論語』陽貨に「子之武城、聞弦歌之声。夫子莞爾而笑曰、『割鷄焉用牛刀』（子 武城に之き、弦歌の声を聞く。夫子 莞爾として笑ひて曰く、『鷄を割くに焉くんぞ牛刀を用ひん』と。）」と見える故事に拠る。また、『史記』儒林列伝に「及高皇帝誅項籍、拳兵困魯、魯中諸儒尚講誦習礼楽、弦歌之音不絶。豈非聖人之遺化、好礼楽之國哉。（高皇帝の項籍を誅し、兵を挙げて魯を困むに及び、魯中の諸儒 尚ほ講誦して礼楽を習ひ、弦歌の音 絶えず。豈に聖人の遺化にして、礼楽を好むの國に非ずや。）」と。詩では晋・潘尼「贈河陽」詩（『文選』卷二十四）「桐鄉建遺烈、武城播弦歌（桐郷に遺烈を建て、武城に弦歌を播す）」とあり、李善は右の『論

語』を引く。

〔環佩〕女性が帯びる玉の飾り。ここは后妃に優れた徳が備わっていることをいう。范曄「後漢書皇后紀論」

（『文選』卷四十九）「居有保阿之訓、動有環珮之響。（居れば保阿の訓へ有り、動けば環珮の響き有り。）」とあるのに拠るだろう。李善注は『列女伝』に「孟姬者、華氏之長女、齊孝公之夫人也。…公游於琅邪、華孟姬從、車奔姫隨車碎。孝公使駟馬立車載姫以帰、姫使侍御者舒帷、以自障蔽、而使傅母使使者曰、『妾聞、妃后踰闕、必乘安車輜駟、下堂必從傅母保阿、進退則鳴玉珮環。…今立車無駟、非所敢受命也』（孟姫なる者は、華氏の長女にして、齊の孝公の夫人なり。…公 琅邪に遊び、華孟姫 從ふに、車 奔り 姫は隨ち車は碎けたり。孝公 駟馬の立車をして姫を載せて以て帰らしめんとするに、姫 侍御者をして帷を舒へ、以て自ら障蔽せしめて、傅母をして使者に応へしめて曰く、『妾 聞く、妃后は闕を踰ゆるに、必ず安車の輜駟に乗り、堂を下るには必ず傅母保阿を從はしめ、進退には則ち鳴玉珮環を鳴らすと。…今 立車に駟無ければ、敢へて命を受くる所に非ざるなり』と。）」とあるのを引く。

### 7 花障蕩舟笑 8 日映下山逢

〔蕩舟〕舟を漕ぐ。舟遊びをする。『韓非子』外儲説左上に「蔡女為桓公妻。桓公与之乘舟、夫人蕩舟。桓公大

懼、禁之不止。怒而出之。(蔡の女 桓公の妻為り。桓公 之れと舟に乗り、夫人 舟を蕩かす。桓公 大いに懼れ、之れを禁ずれども止めず。怒りて之れを出す。)とあり、ここから舟遊びを楽しむ女性をいう。簡文帝蕭綱「雍州曲・北渚」(『玉台』卷七)に「好值城旁人、多逢蕩舟妾(好く値ふ 城旁の人、多く逢ふ 蕩舟の妾)」とあり、また梁・鮑泉「落日看還」詩(『玉台』卷八)には「誰家蕩舟妾、何処織縑人(誰が家ぞ 蕩舟の妾、何れの処か 織縑の人)」とある。「織縑人」は漢・無名氏「古詩」(『玉台』卷一)に「上山采靡蕪、下山逢故夫。長跪問故夫、新人復何如。新人雖言好、未若故人姝。∴。新人工織縑、故人工織素(山に上りて靡蕪を採り、山を下りて故夫に逢ふ。長跪して故夫に問ふ、新人 復た何如と。新人 好しと言ふと雖も、未だ故人の姝なるに若かず。∴。新人は縑を織るに工なり、故人は素を織るに工なり)」とあるのに拠り、「故人」の後に娶った新しい妻をいう。

〔日映〕太陽が明るく照らす。吳均「与柳惲相贈答」詩六首(『玉台』卷六)に「日映昆明水、春生鷓鴣樓(日は映ず 昆明の水、春は生ず 鷓鴣楼)」と。

〔下山逢〕山を下りてきた前の妻。右に引いた「古詩(上山采靡蕪)」に拠る。派手な美しさはないが慎ましやかな女性をいうのだろう。